

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「心に響いた言葉たち」

昨年12月22日に最終回となったフジテレビ系「木曜劇場」枠にて放送されていたテレビドラマ『silent』（サイレント）は、主人公の青羽紬（あおば・つむぎ）が、「若年発症型両側性感音難聴」を患い、音のない世界で生きているかつての恋人である佐倉想（さくら・そう）と、“出会い直す”という、切なくも温かいラブストーリーです。そのドラマから、言葉にまつわる名言、“心に響いた言葉たち”を紹介します。

“心に響いた言葉たち”

「言葉は伝えたい相手によって、想いによって、どんな形にも変わる」

「言葉が生まれたのは、きっと想いの先にいる誰かとつながるため」

「青羽の声思い出せないしもう聴けない。でも青羽の言葉が見えるようになってよかった」

「言葉の意味を理解することと、相手の想いが分かるってことは違った」

「人それぞれ違う考え方があって違う生き方してきたんだから分かり合えないことは絶対ある。他人のこと可哀想に思ったり間違ってるって否定したくもなる。それでも一緒にいたいと思う人と一緒にいるために、言葉があるんだと思う」

「お元気ですか」という励ましの言葉もうれしいのですが、「お元気ですね」という言葉のほうが、「とても元気そうに見えて、いいね!」という優しさが伝わるように思います。「か」と「ね」だけの違いですが、人の心への響き方は大きく違ってきます。言葉には温度があり、人を癒やす力があります。温かい言葉は相手の心を和やかにし、勇気づけてくれます。冷たい言葉は相手の心を傷付け、同時に絶望的にさせてしまうこともあります。言葉は消えてしまいますが、聞き手（受け手）に残ります。たった一言が人生を変える大きな力を持っていることを認識しながら、どんな小さな言葉も大切にしたいものです。

「理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる」といわれるように、全て同じ経験を積んでいる人はいないので、人と人が100%理解し合えることは不可能です。100%伝わるコミュニケーションに近付けるためには、言葉の意味ではなくその奥にある相手の想いを理解する、直接会って話す、主語と数字をはっきり伝える、言葉が見えるように視覚情報（文字、イラスト、ジェスチャー等）を活用することが大切です。

子どもと保護者とつながるために、見える言葉を通して、想いの形を重ね合わせましょう。



とれたて直送便



「笑う門には福来たる」

大人は一日平均17回笑い、小学生は300回笑うそうです。笑いは感情表現であり、コミュニケーションの一つです。また、人間関係を円滑にする働きもあります。

幼稚園に通う子どもたちに、母親の似顔絵を描いてもらったところ、全員が笑顔だったそうです。いつでもお母さんが笑って子どもに接しているわけではないのですが、子どもにとって一番印象深いお母さんの表情が笑っている顔なんです。子どもは、本能で大人の笑顔を求めています。

今年も子どもたちに、優しい笑顔で温かい言葉を掛けましょう！（㊦）